

ふくはまの風

第38号 2021年12月6日

社会福祉法人 福浜会

一人ひとりが望む生活と柔軟な対応

新型コロナウイルス感染症が、報道されてから2年になろうとしています。緊急事態宣言が解除され、発表される感染者数も徐々に減少してきてはいますが、変異株による拡大への不安もなくなってきたわけでもなく、今後の見通しを立てるにはまだ難しい現状です。

この影響により今年度も、昨年と同様に法人全体の行事や法人役員会等も、対面等を避けなければならないため、開催できない状況が続いてきました。また施設においては、自粛による施設閉所等を経験し、楽しみであった宿泊体験や地域交流会も中止せざるを得ませんでした。毎年の恒例である地域交流会等の行事が実施できないことは、これまで築き上げてきた多くの方々の関係を考えると、とても残念です。毎年その時期になると、今年もあの人にまた会えるかなと心待ちになるのは、私だけでなく、利用者さんやご家族も同じです。正常に近い日常が早く来るように望まずにはられません。

さて昨年度は、他施設を利用されていた方が年度途中より当法人施設を利用するケースがありました。法人・施設の活動内容や方向性とご本人やご家族の意向のミスマッチが、年数を重ねる中で見られることがあります。心の中にある希望や願いに寄り添い、理解し、その人らしさ（自己実現と言います）の支えとなる手立てを工夫しなさいよ、と言われてるように思えます。一人ひとりの心身の状況に適った柔軟性のある対応が大事なんだと改めて感じています。

一方、特別支援学校卒業後の施設の利用先が定まらず、地域の事業所等が集まり話し合いを重ねてきたケース事例があります。今のところ、地域にある2施設でそれぞれ週に1度利用していますが、少しでも支援の手が増えるように相談支援センターを中心に話し合いが続けられています。

このことは、現在施設を利用されている方たちの支援（暮らし・権利・自由・安全を守る）を保障することと、これから社会に出てくる人やそのご家族の新たな支援の狭間で、事業所としての悩ましさを感じつつ、前向きにまた柔軟に対処しなければならない課題となっています。

最後に、一昨年の頃よりご家族より相談があり、当法人内で課題となってきたことに触れておきます。それは、親御さんと利用者さんが共に高齢になり、これからの暮らし方をご家族と一緒に考えていく時期が来ている現状についてです。「老障介護」とも「8050問題」とも言われています。複数のご家族からの相談を受け、今年度プロジェクトチームが発足し、話し合いが始まりました。実際、親御さんが高齢者施設に入所され、今さまざまな支援サービスを受けながら、障がいのあるご兄妹だけで暮らしている事例があります。また、さまざまなサービスを受けながら、親亡き後の一人暮らし（自立）に向けて、一歩ずつ歩みを始めている人もいます。

児童施設が大人の方を受け入れることは難しいように、通所施設が入所施設の代わりをすぐにはできない訳ではなく、かといって入所施設が毎年卒業後の在宅の人を受け入れることも難しい。利用者さんとともに日々過ごしている従事者（職員）の方たちが、その人の将来を見据えた幅広い視点でみんなの望む生活を描けるのかどうか。その成長が、障がいのある一人ひとりのこれからの暮らしに直結していくのではないかと思うのです。（高橋）